緊急座談会 “今池まつり”は、こうして始まった

Since 1989 平成元年

東南・西南・北エリアが一体となって行う「いきいき今池お祭りウィーク」、通称「今池まつり」。その記念すべき第1回の実行委員長を務めた元・六文銭の店主・三嶋寛さんを囲み、現・実行委員長の森田裕をはじめ、田中兼二、白石一博ら幹部スタッフが座談会を敢行! 30周年の大きな節目を前に、いま一度、まつりの原点を尋ねた。

森田「辛うじて俺は第1回から関わってますが、いま運営している人で最初の頃を知っている人は本当に少ないんですよ。1回目は9日間でしたっけ?」

三嶋「いや、11日間」

森田「なぜ11日も!?」

三嶋「始まったのが1989年。桜通線が今池で東山線と交差することになって、行政が今池の街をどうしたらいいかリサーチしたんです。そのまとめたものが提言されたんですけど、『ゴチャゴチャしている』『雑然としているからダメ』、そんな評価だったんですよね」

森田「それを都市計画で変えようとした思惑も見えますね」

三嶋「ただ、“雑然”というのは間違っていたわけでもない。当時の今池はグランドキャバレーと言われる昔の社交場を頂点としていました。それが7つ8つあって、ホステスさんも何百人といて、近郷近在から人が集まっていた。ホステスさんと客が出勤前後に飲食店を利用することでキャバレーを頂点とする生態系が成立していたんです。ところが89年頃からキャバレーが即物化し、今池も衰退し始める。その頃さっきの提言が出ます。しかし雑然と言われたおかげで、一度おもちゃ箱をひっくり返すみたいに全部ぶちまけてみようと。それで民謡同好会からバレエ教室まで集めてきたら11日間になっちゃった」

森田「11日やりたかったんじゃなくて必要だったんだ!」

三嶋「そうしたら“パンドラの箱”じゃないけど、最後の希望が出てくるかもしれないと。結果ぶちまけることは必要だったんです。翌年それを資料にして、整理して積み上げて30回につながったから。大変ではありましたよ。間違えてスタッフのシャツを長袖トレーナーにしちゃったから、もう暑くて(笑)。他にも雑然を逆手にとったこととして、今池は大通りに分断されているので、ステージを集約せず点在させたんです。どこに行っても何かやってる、行ったり来たりできる形にしようと。バザールについては、闇市からできた街だから、その再現ですね」

田中「会場はどこからどこまでだったんですか?」

三嶋「ダイエー(現・イオン)の裏から高牟神社まで」

田中「お~!!」

白石「ウィークって名称は?」

三嶋「第1回が『いきいきお祭りウィーク』だったから。ウィークは11日を指してます」

白石「よくやりましたね」

森田「ステージに機材があるから夜中危ないとか言って、交代でテントに泊まり込んだり」

三嶋「そんなのが、また楽しいんだ。毎晩、ステージ前で宴会になったりしてね(笑)」

自分たちでやる、自分が楽しむ

三嶋「まつりがあるから今池が豊かになったかどうかはわからないけど、組織にはなりましたよね。商店街の様々なイベントも、まつりがピークにあって成立してるでしょ?」

森田「本当そうです。じゃなければ、みんなとこんなに仲良くない(笑)」

白石「お客さんを回し合うもんね。だから、みなさんビックリします」

三嶋「白石さんは真ん中ぐらいの世代だと思うけど、どういう感じで入ってきたの?」

白石「僕はまず、今池まつりを全然知らなくて。たまたま名商連(名古屋市商店街振興組合連合会)でシンジさんに出会って誘われ、萬福鮨さんの前で初めて手伝ったんです。そしたら『ホントここ日本なのか!?』みたいな感じで(笑)。今池でこんなことやっとる、やれるんだと驚きました」

三嶋「賢二さんはプロレスを始めてどれぐらい?」

田中「15年ぐらいかなあ。新しい出し物を探していた頃で、もともと東海プロレスを紹介したい気持ちもあって平井さん(中屋パン)に相談したんです。当時、学生や社会人をしながらアマチュアプロレスをやっていた団体で、それを引っ張ってきたかった。日本人ってプロレスが好きですよね。街頭テレビで力道山の試合を流していたように、今池でプロレスができんかなと」

三嶋「今池公園なんかも、ほのぼのとした感じがあっていいですよね」

森田「あそこは親子連れがゆっくりできるところを作ろうと始まったんです。外部の人がやりたいって言ってきたので、商店街も協力するよと」

三嶋「今は、テキ屋さん入っているの?」

森田「入れてないです。それも三嶋さんたちが決めたんですよね」

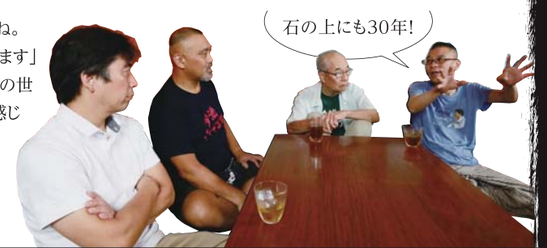
三嶋「あと、代理店も一切入っていない。今池商店街にあった青年部や発展会が動き、下から積み上げる形で作り上げたんです。ある年には民謡グループのお婆ちゃんを受け入れたんだけど、揃いの衣装でピシッと踊ってくれてね」

森田「カラオケ大会もありましたよね」

田中「バザールも最初はコンテストになってて、面白い賞品を出して競い合った。だから出店も面白かったよね」

森田「儲けようというより、目立とうと(笑)」

三嶋「遠いところから来てもらう以前に、まず自分たちが楽しまなきゃ。今池まつりは、自分たちが楽しいんです。最初のコンセプトは『手作りでやる』『テキ屋を入れない』『来る者は拒まず』、そして『いつ、どこへ行ってもやっている』という回遊性でした。それは今後も続けてほしいですね」



今池まつり 事件簿

★episode 01

第1回の際『バトカー叩き』というワイルドな出し物が出現。廃車寸前の中古車をパトカー色にペイントして、金属バットで叩くだけの、シンプルながらヤンチャ心を鷲づかみにする企画は好評だったが、これには警察が黙っていなかった(当たり前です…)。実行委員長だった三嶋さんは、歩行者天国を実施するため人脈を駆使してどうにか警察の協力をとりつけた経緯もあって「最大限協力しているのに、なんなんだ!」と大目玉を食らう。そこで、お詫び行脚するも「公序良俗に反して人に危害を与えるようなものでない限り、止めろとは言えない」と説明。反対に企画者たちへも状況を説明し、最後は自主的な中止でなんとか収まった。

★episode 02

バトカーネタ、その2。名古屋の名物パフォーマー・浜島嘉幸さんが参加した年のこと。浜島さんが作品の流れで局部を露出したところ、善意の市民が警察に通報。ただちにパトカーが駆けつけるも、実行委員長の竹内さんと当時まだ若手だった森田さんがトランシーバーでパトカーの動向を連絡しあうという、冷静沈着かつ華麗な連携プレーを披露! 結果、事なき(!?)を得たのであった。

★episode 03

どこでも無事に終わったことがないと言われるほど騒動が付き物だったパンクバンド「THE STAR CLUB」が今池まつりに登場した時は、演奏が3分で終わるアクシデント発生!? 当時はパンクバンドに一種の派閥があり、会場は最初から異様な空気に包まれていた。そして演奏が始まるやいなや抗争勃発! たった3分、1フレーズ歌っただけで、ライブは中止に。「噂は聴いていたので、ステージの最前列に屈強な男性陣を配置してはいたんだけど、始まると玉子やトマトは飛んでくるし、女の子たちは押しつぶされそうになって泣き出すし。警察に『中止! 中止!!』と言われたことはあっても、自分で『中止! 中止!!』て叫んだのは、後にも先にもあの時だけですよ(苦笑)」と三嶋さん。

★episode 04

去年は、今池まつりの長い歴史で初めて「路上バザール」が中止となる出来事に見舞われた。接近していた台風の影響が強く、テントが飛ぶなどの事故を考慮した苦渋の選択。雨風の問題と言えば、恒例の「リング上公開結婚式」も天候に左右される可能性が大きい。今池まつりは秋の風物詩なので気候は不安定な時期だが、リング上結婚式が雨で室内に変更となったのは意外にも過去1回だけ。しかも、千種と池下がゲリラ豪雨の時でさえ今池だけ晴れていた珍現象は、どういうパワーによるものなのか……!?